

(1) 安政五年二月福井県に生まれる

(2) 明治十六年東京大学医学部卒業

(3) 明治十六年より同二十一年まで大分県立医学校内科教諭、大分で積極的に剖検を行っている(大分の医療史)。

(4) 明治二十四年頃より湿性肋膜炎に罹患(金沢医学会雑誌二六号)

(5) 明治二十五年三月退官、のち大坂市谷町二丁目一六二で開業、神戸花隈町へ転居(年代不詳)、明治四十年六月十日神戸で歿す。享年五十歳。

(金沢医科大学)

一八六二年(文久二年)麻疹の

大流行と長州藩

田中助一

一八六二年(文久二年)夏より秋にかけて、江戸をはじめ各地に麻疹の大流行があった。この時長州(萩)藩は、朝廷と幕府との間に公武周旋運動を熱心に行っていて、政治的に極めて重要な立場にあった。藩主毛利敬親は江戸藩邸(麻布邸)に滞在中であったが、藩主の主任侍医青木周弼が文久二年五月二十五日付で萩の弟研蔵(医家)に与えた書簡により、既に五月朔日以前より萩に麻疹が流行していたことや、江戸においても相当の流行があり、藩邸内にも感染者があったことがわかる。そして江戸藩邸内の患者は、早速先に建設せられた病院に収容したが、段々多くなり、その上藩主が公武周旋のため上京することとなっていて、その準備と一緒に五月終頃から六月初頃にかけては邸内は大混雑を呈した。

同年六月六日敬親は予定通り上洛しようとして、朝六時（午前六時）麻布邸を出発し、途を中仙道にとつて、この日大宮（友右衛門宅）に駐泊した。七日熊谷（竹井保四郎宅）、八日新町（小村林甚左衛門宅）に進んだ。発駕以後随員中

にも段々麻疹患者が出たので、それ等の者は駕籠に乗せて行列の後に随行させたが、この駅に到った時には数人の発病者が出たので、仮に療養室を借用して薬餌を与え、櫻井慎平・平林清蔵兩人へ仲間若干人を付けて看護させることとした。桜井は武士でありながら現在の衛生兵のように病人看護の心得があつたので、特に選任せられたのである。

九日松井町（金井藤右衛門宅）・十日追分（土屋市右衛門宅）・十一日長久保（石合平衛門宅）・十二日下諏訪（岩波太左衛門宅）と進んだが、士卒の発病者が日増しに多くなつたので、遂に十二日より十五日まで下諏訪に滞在することとなつた。そして同地に臨時に療養所を設け、医員および看護卒を付けて、各駅より遅れて到着する患者を治療させることとなつた。

敬親は侍医二階玄東・松尾修庵へ患者の診察をさせたが、更に玄東を上州地方まで帰えして沿路の患者を檢按治

療させた。また井上与四郎に命じ還行して桶川駅に至り發行に遅れた患者を檢分させた。更に敬親は従行の士卒へ悉く酒を饗して長旅の苦勞を慰めた。

十六日朝下諏訪を出発することとなつたが、敬親は発駕に臨み、患者の心を憐れんで諭告を授けて慰め、侍医の一人の針医滝戸祐庵に身柄一代本道兼帯を命じ、同地に留めて患者の治療に当らせ、また山県弥八・渡辺宗一の兩人へ療養の諸務管理を命じた。こうして青木周弼・赤川玄悦・松尾修庵の三侍医が敬親に随従して下諏訪を発し、同日本山（小林吉右衛門宅）・十七日蕨原（手嶋平右衛門宅）・十八日上ヶ松（塚本次郎左衛門宅）に進んだ。この日去る八日敬親の召命によつて京都を発した家老浦鞆負が同駅に到着して、京都の近況を報告し、公駕に従つて上洛することとなつた。十九日三戸野（鮎沢弥右衛門宅）・二十日中津川（市岡長右衛門宅）に進んだ。

この日藩世子定広の内命を奉じた桂小五郎（後の木戸孝允）が京都より到着し、敬親に面会して情勢激變のことを詳しく報告した。よつて浦はその夜旅館の一室に桂を招き、当役（江戸家老、藩政の最高責任者）益田弾正・直目付

林主税・右筆兼重讓蔵・右筆山田宇右衛門等と会して、政情一変に対して長州藩建白の方針もまた修正すべきであるとして、二十二日まで熟議を重ねた。その間敬親は同駅に留まり、儀衛補充のため京都藩邸に士卒の急派を命じた。二十三日益田は山田を従えて京都に先行し、桂もまた任務を終えて京都に帰った。二十四日敬親は中津川を發して同夜

は大久手（保母市郎兵衛宅）に駐泊、二十五日大田（福次郎右衛門宅）、二十六日加納（松波藤右衛門宅）、二十七日垂井（粟田文庫）、二十八日鳥井本（周助宅）に進んだ。この日青木周弼は萩の研蔵に手紙を出しているが、それによってこの上洛道中が、麻疹禍と酷暑とのために如何に慘憺たるものであったかということがわかる。参勤道中に二百余人の発病者を出したことは、長州藩未曾有のことであった。二十九日武佐（下川七郎右衛門宅）、晦日草津（田中兵庫宅）、七月朔日草津に泊り、二日京都三条河原町の藩邸に到着した。敬親は入京して見ると京都の形勢は予想に反して尊攘論が熾烈であるので、病氣届を出して暫く参内を見合せ、その間重臣等と相談して、従来の「公武一和・航海遠略」論では到底時局を收拾することが不可能であることを洞察

し、決然朝廷の御意向に従って尊攘論を遵奉する旨を告げ、これより一意尊攘運動に尽瘁することとなった。

このことは伝染病の流行が政治活動に大きく影響した一例である。